

## 5章 社会的認識の文化的媒介モデル

対応性バイアスの文化心理学的検討

北山 忍・増田 貴彦

社会的……経験の構造は、深く内面化され語りの一部となった素朴心理学的観念のみによって可能になっているわけではない。同時に各々の文化は、歴史的にある制度の数々をこれらの観念を支え強化するような形で作り上げていくが、これら文化にある制度によっても（社会的経験の）構造は可能になっている (Bruner, 1990, p. 57).

### 5.1 はじめに

社会的コミュニケーションを円滑に進めるためには、話し手の発話内容や周囲の状況から意図を推測することが必須である。また、満足のいく社会的関係を結ぶためには、場面の性質や相手の行動からその人物の性格や態度を推測しなくてはならない。あるいは会社やクラブなどの組織で、仕事をうまくこなすためには、時と場合に応じて組織内の人の行動の目的を的確に把握する必要がある。これらの例に見られる対人認知のプロセスは、社会心理学の分野では意図、信念、態度、性格特性、目的など人のもつ「内的属性」の問題として、特に欧米圏で多くの研究が行われてきている。

これらの研究から、たとえばある行動が状況的要因の結果として十分理解できても、人はその行動に対応した内的属性をその当事者に付与することが知られている。たとえば、ジョーンズとハリス (Jones & Harris, 1967) はアメリカ人被験者に、ある人物が書いたとされる政治に関するエッセイ (短い記述文) を

読ませ、その人物の当該の問題についての態度を推測させた。まずエッセイの立場はその人物により自由に選ばれたものであると知らされていた場合、それに対応した態度がその人物に付与されていた。しかし、エッセイの立場は別の人物により割り当てられたもので、当人には立場を選択する自由はなかった旨を知らされていた場合にも、いくぶん弱いものの基本的には同様の態度付与が見られた。もしも行動が状況要因により引き起こされていたのなら、その行動は当人自身の内的属性を表わしてはいないはずである。したがって、このような心理的傾向は状況要因の関与を無視し、内的属性の関与を過大視する一種のバイアスであるといつてよい。よってこの現象は、対応性バイアスと呼ばれている (Gilbert & Malone, 1995; Jones, 1979)。

対応性バイアスは、はたして日本をはじめとするアジア圏の文化でも同様に見られるだろうか。2章で北山が述べた文化心理学の視点からすると、心理的プロセスや心理的構造は、当該の文化にある慣習や意味の構造と有機的に結びついている可能性がある (北山, 1997; Kitayama et al., 1997; Fiske et al., in press)。なぜなら、人は所与の文化の社会的現実から自らの反応をあわせ、その文化の一員となっていくが、その過程で、文化的・社会的現実に対応し、それと連動した反応を可能にする心理的傾向、プロセス、あるいは心理的構造の幾々を身につけていくと考えられるからである。この視点からすると、対応性バイアスは欧米にある文化的慣習や意味の構造を反映した心理的傾向であるかもしれない。さらに、ことによると、異なった慣習や意味の構造をもつ文化圏においては対応性バイアスは見られないばかりか、別のバイアスが存在するかもしれない。これらの可能性は、社会的認識のプロセスと構造は文化的産物であることを示唆している。本章では、この視点にもとづいた理論モデルを提示し、次いで、それにもとづいて既存の比較文化的実証研究をレビューし、われわれ自身による最新のデータもあわせて報告する。そしてここでの理論モデルの意義を考察し、文化心理学の今後を展望する。

## 5.2 文化的媒介モデル

北山と増田 (Kitayama & Masuda, 1997) は、社会的推論の性質を分析する

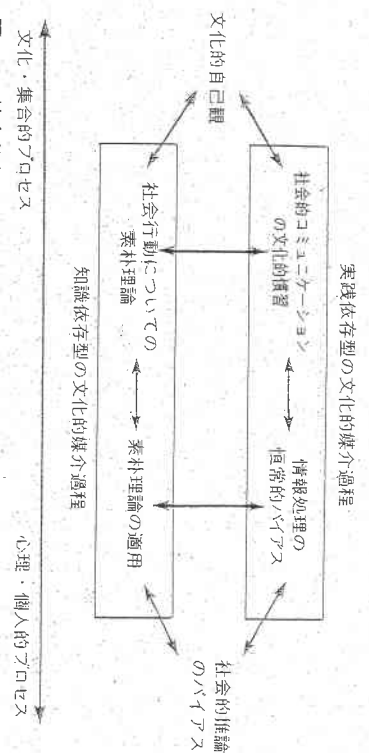


図5-1 社会的認識の文化的媒介過程モデル (Kitayama & Masuda, 1997 より)

ためには文化・集合的プロセスと心理・個人的プロセスの相互構成過程に注目する必要があると提唱し、この観点から社会的認識における文化心理学的媒介過程についてのモデル (文化的媒介過程モデル) を示した。このモデルは図5-1に示されている。ここでは、文化的、集合的プロセスは図の左側に、心理的、個人的プロセスは右側に描かれている。これら二つのプロセスは相互構成的関係にある。つまり、心のプロセスは、文化の諸要素と有機的に連動しそれらを取り込むことにより成り立つ。かくして、多くの心は類似の性質をもつにいたるが、文化の諸要素はこれらの心の集合的活動により維持、変容され、将来に受け継がれていく。したがって、これら両者は厳密に二分することはできない。2章で北山が述べたように、ここにある心と文化の相互構成過程を解きあかすことが文化心理学の主要な課題である。図5-1のモデルは、文化心理学の考え方を特に社会的認識に適用したものである。

このモデルによると、対応性バイアスなど社会的推論のバイアスは当該の文化にある自己観と結びついている。特に近代以降、欧米文化には自己とは互いに独立した存在であるとする認識・存在論 (相互独立的自己観) が根づいてきている (北山, 1997; Markus & Kitayama, 1991)。対応性バイアスは、このような文化的自己観を反映して成立している社会の一員になることを通じて、人が身につける認知システムに固有のバイアスであると考えられる。一方、アジア圏の文化には自己とは互いに結びつき、相互に依存・協調した存在であるとする認識・存在論 (相互協調的自己観) が歴史的に根づいてきている。このよ

うな文化的自己観を反映して成立している社会の一員になることを通じて、人はそれに対応したバイアスを持つ認知システムを身につけるであろう。

このようにして文化的自己観が心理的システムに変換されていくプロセスには、「知識依存型」と「実践依存型」の二つがある。これまで心理学においては、認識の形態の文化的差異はそれぞれの文化の人々がともに身につけた素朴理論の違いが直接的に反映されたものだ、とされることが多かった。つまり、文化的意味構造とは、各人のもつ意味構造のうち、文化内の他の人々と共有されたものであるとする見方である。人それぞれが自らの内にもつ文化的意味によりある効果が生起する場合、これをここでは、知識依存型の文化的媒介過程と呼ぶ。しかし、われわれは文化による影響はより広範にわたると考える。つまり、文化にある観念は、各人が知っていないにもかかわらず、慣習、制度、儀礼などの「文化そのもの」の性質を歴史的に作り上げることにより、そのような文化的現実と呼応した心理的プロセスを各人のなかに育む。つまり、文化的意味構造は、文化にある現実のパターンに組み入れられた結果として、社会、歴史、集合的プロセスのなかに暗黙の内に存在するにいたる。このような集合的意味（＝慣習のパターン）の結果として、ある効果が生起する場合、これをここでは、実践依存型の文化的媒介過程と呼ぶ。なぜならそのような効果は文化的慣習のパターンを实践することの一部としてあるからである。本章の冒頭にあるブルナー（J. S. Bruner）の引用は、これら二つの文化的媒介過程の存在を指摘したものである。

### 5.2.1 知識依存型プロセス

社会的推論は、それぞれの文化にある通念や常識といった素朴理論の影響を受ける。アメリカなどの欧米文化には、行動を引き起こす主要な要因は、その行為者自身の内的属性（意図、信念、態度、性格特性、目的など）だとする属性主義理論が広く共有されている（これらの点についてのより詳細な考察は？

- 1) ただし、同書 (Acts of meaning) における彼の議論は、ほぼすべて文化にある「語り」による認知的意味の生れ、つまり、図5-1の知識依存型の文化的媒介過程に費やされている。よって、ここでの行為 (acts) とは言語行為に限定されている。特に、文化的慣習とその実践への歴史構成的拠点は稀薄である。同様の問題は、彼の "The culture of education" (Bruner, 1996) にも関しても、またさらには特に米国における近年の解釈学的研究全般に関して、指摘できる。

章を参照せよ)。たとえば、なぜ人がパーティに行くかといえば、パーティで友人と会うのを楽しみにしているからだなどとする常識的理解がある。このような素朴理論は、相互独立的自己観の現われの一つである。同様の理論は特に能力についてドウェク (Dweck, 1993) が同定している特性理論に対応している。この素朴理論では、人の能力とはその人物に生得的に備わった実体であり、IQテストなどの能力課題の成績はこの実体の現われであるとされる。これに対応してアジア圏の文化の多くでは、行動は、行為者自身の周囲にある要因が契機になり引き起こされるとする状況主義理論が広く共有されている。たとえば、なぜ人がコンパに行くかという点、それは「つきあい」だからだなどといった常識的理解がある。このような素朴理論は相互協調的自己観の現われの一つである。同様の理論は、特に能力についてドウェクが同定している増加理論に対応している。この素朴理論では、人の能力は生得的な実体ではなく、その人の努力や周囲のさまざまな要因の結果として向上していく特性であるとされる。社会的場面で、人は当該の文化から学習した素朴理論に照らしてさまざまな推論や判断をする。たとえば、行動の意味を属性主義理論にもとづいて考えると、その行動の原因は行為者の内にあるに違いないと推測されることになる。ここには強い対応性バイアスが生じる。これに対して、もしそこに状況主義理論が当てはめられると、行動の原因は行為者の周囲にあるならかの要因に求められるであろう。ここでは対応性バイアスは弱まるか消失するであろう。

### 5.2.2 実践依存型プロセス

文化は人の頭の中にある知識、イメージ、理論などの集合というだけではない。文化の要素には、これらに加えて毎日の慣習、スクリプト、社会組織、儀礼など日常生活にある集合的パターンが含まれる。前者は文化のなかで生きることを通じて人が獲得する知識であるのに対し、後者はその文化を生きることを通じて実践できるようになる行為のパターンである。日々の生活にある現実を作り上げている行為的集合的パターンは、その文化において歴史的に育まれてきている自己観と深く結びついている。社会化の過程を通じて人は自らの

- 2) 「藍は藍よりいって藍より青く」といったように人を植物になぞらえ、(水や空などの) 環境要因によって人 (= 藍) そのものの性質が変わるとする能力観は、この一例である。

反応をこのような日常的現実に合わせていく。そして、これら日々の慣習のパターンと運動した反応の数々は、本人にとって当然、自明の行為として身につくにいたる。特に、社会的推論と深くかかわっているのは、社会的コミュニケーションにまつわる慣習の数々である。

アメリカなどの欧米文化においては、各人の考えや思いを直接的に表現するという慣習が多い。これらの慣習の根底には、自己とは相互に独立したものであり、それゆえ各人は情報的にも周知から遮断されているという前提がある。このような文化的慣習にもとづいてなされるコミュニケーションにおいては、「述べたことは」は、まさに「伝えたいとしたこと」である。そしてこのようなコミュニケーションに参加することを通じて、人は「述べたこと」を聞いてそれを「伝えたいとしたこと」であると直接的に理解する心理的傾向を身につけていくと考えられる。このようにして成立した情報処理システムは、強い対応性バイアスを示すであろう。

対照的にアジア圏の文化においては、各人の考えや思いを間接的に伝えるという慣習が多い。これらの慣習の根底には、自己とは相互に結びつき、情報や知識も互いに共有しているという前提がある。このような文化的慣習にもとづいてなされるコミュニケーションにあつては、人のもつ情報は「語るまでもなく察すべき」ものである。そしてこのようなコミュニケーションに参加することを通じて、人は「述べたこと」を聞くと、そこにあるさまざまな手がかりを用い、それらを総合的に判断したうえで、話し手が「伝えたいとしたこと」や「思っていたこと」などを推論する心理的傾向を身につけていくことであろう。このようにして成立した情報処理システムにも固有のバイアスがあると考えられる。しかしこのシステムには、少なくとも欧米で見られるような対応性バイアスは見られないであろうと予測できる。

### 5.2.3 両者の相互作用

知識依存型プロセスは、文化にある常識や通念を理解したうえで、それを各人が個々の推論場面に適用することにより生起する。これに対して、実践依存型プロセスは、文化的慣習のパターンと運動する心理システムが恒常的に成立することにより生起する。よってこれらは理論的に区別されるべきものである。

しかし、同時にこれら二つのプロセスは相互に深く結びついている。この事情は、図5-1では縦の矢印により示されている。

まず、当該の文化にあるコミュニケーションの慣習は、社会関係や自己についての素朴理論を反映してその文化に歴史的に定着する。同時に、いったんそのような慣習が定着し、それが「あたりまえのもの」として通用するようになると、その結果、そこにある素朴理論は妥当なものであると認識される。なぜなら、その理論は、現実そのものに対応しているからである。もちろん、「理論が現実に当てはまっている」のは、「理論が本当に正しい」からというより、むしろ、歴史的変遷のなかで「現実が理論を反映して成立してきている」ためである。人は通常、現実がこのようにして歴史的に成立してきているとまで考えることはないが、この点を理解することは心理学における文化の重要性を認識するために必須である<sup>3)</sup>。さらにこの歴史構成的観点からすると、社会的認識のバイアスは現実にある文化的パターンに円応していると考えられる。たとえば対応性バイアスは欧米文化の現実と相補的關係にある。この認識のバイアスを、ロス (Ross, 1977) は帰属における「根本的な誤り」であるとしたり。しかし、認識のバイアスが当該の文化と運動しているとしたら、そこにある現実とのかねあいで、それは「正しい」ことが多いはずである。さらに、同様のバイアスは文化によって生起しないとしたり、これを「根本的」と呼ぶ根拠にも欠ける。したがって、ロスの主張の妥当性には疑問が残る。むしろ、ここでの議論から根本的プロセスをあえて挙げるとしたら、文化と心理の相互構成の原理である。

さらに、文化的実践を通じて、いったん状況的要因に注意が向く認知バイアスが身に付くと、これは状況主義的理論を喚起する。逆に状況主義的理論が特定の行動に適用されると、これは状況的要因への注意を促す。このような相乗効果の結果として、アジア文化圏には状況的要因を重視する認知的バイアスが

3) 同様の関係は、古典的経済学と近代資本主義社会との間に見られる。古典的経済学は、社会における経済活動を分析する道具として、特に欧米文化ではある一定の妥当性をもっている。しかし、この妥当性は、近代、特に近代欧米における経済活動がアダム・スミスに端を発する「古典的経済学」の前提を所与のものとして形づくられてきたという歴史的経緯により保証されている。同様の分析は、経済学の理論をモデルにした心理学理論（たとえば、合理的意思決定理論）全般に当てはまる。

生じる可能性がある。同様の相乗作用は、欧米文化においても見られるだろう。属性主義的理論と内的属性へ注意が向く認知バイアスとは、密接に結びついている。

しかし、同時にこれら二つのプロセスは、それぞれ独立に機能することもある。たとえば、いったん、情報処理の恒常的バイアスが社会化の結果として確立されると、たとえ関連の文化的通念や信念、あるいは素朴理論などが喚起されないような事態においても、当該の文化に特有のバイアスが推論や判断に見られるであろう。同様に、たとえ情報処理のバイアスが無関係な事態においても、素朴理論の適用の結果として当該の文化に特有のバイアスが推論や判断に見られるであろう。

### 5.3 実証研究のレビュー

#### 5.3.1 欧米の属性推論研究

対応性バイアスの強固性 前節では、欧米の人々は、まず第一に、内的属性に自動的に注目する情報処理バイアスをもっていると仮定した。つまり、ある行動を観察すると、そこからそれに対応した内的属性が自発的に推測されるであろう。第二に、これらの人々は人の行動は当人の内的属性により導かれていくという素朴理論をもっていると仮定した。この両者から、たとえば、明らかな外的要因があってもそれは無視されがちであり、その結果、対応性バイアスが見られるであろうと予測できる。ジョーンズとハリス (1967) によって考案された実験パラダイムを用いた欧米の研究では、非常に強い対応性バイアスが見られる。しかも、このバイアスは、状況的要因の存在や性質を明白にしてもなお見られる。たとえば、ギルバートとジョーンズ (Gilbert & Jones, 1986) は、被験者自らに任意の立場のエッセイを選択させ、それを刺激人物に読ませた。被験者はそのエッセイを読んでいる刺激人物を見て、その人物の態度を推定した。この手続きは、刺激人物が経験した状況の性質を、被験者が明白に理解することができるように考案されたものである。しかし、このような手続きをとっても、なおかつ非常に強い対応性バイアスが見られた。さらにこの研究では、刺激人物は他の人の書いたエッセイを単に読んでいるだけであった。このよう

な事態においても対応性バイアスが起きるという事実は、このバイアスが抑制不可能な心理傾向であることを示している。

加えて、属性主義理論が素朴理論として利用されると、対応性バイアスはさらに助長されるであろう。たとえば、嘉志摩ら (Kashima et al., 1992) は、オーストラリア人を対象に、まず、人の態度と行動は一貫性をもっているという信念を計測した。この信念は属性主義理論の一つの現われである。そして態度推論課題において見られる対応性バイアスは、この信念を強くもっている者の間で特に顕著になることを示した。同様の知見は、チェーラ (Chen et al., 1997) によっても示されている。これらは、知識依存型の文化的媒介過程の存在を強く示唆している。

内的属性推論の自発性 いくつかの研究は、内的属性の自発的な推論が起きるという予測に、より直接的な証拠を示してきている。ワインターとワルマン (Winter & Uleman, 1984) は、アメリカ人被験者に行動の記述文を見せた後、もとの文章を思い出すよう求めた。そして、文章の記憶は、文章に対応した性格特性用語が再生の手がかりとして与えられた場合に特によくなることを示した。この結果は、行動の記述を読んだ際に、その行動に対応した性格特性が自発的に推測されていたことを示している。この研究で被験者は単に行動記述を読むように求められただけだった。このような条件でも内的属性の推論が起きていたという事実は、これが十分に自動化された、情報処理の恒常的バイアスであることを示している。この事実は、実践依存型の文化的媒介過程の存在を示唆している。

欧米の研究結果を体系的に説明するために、ギルバートとマローン (Gilbert & Malone, 1995) は、他の人の行動に接すると、人はまずその行動に対応した行為者の内的属性 (性格特性、態度) を自動的に推論し、次いで行動が生じた外的要因を意図的かつ選択的に考慮することにより、自動的になされた内的属性の付与を弱めるとした。このモデルによると、外的要因の考慮は十分になされないために対応性バイアスは生じると考えられる。ギルバートとマローン (1995) のモデルは、本章での分析に沿うものである。しかし同時にここでの分析によると、彼らのモデルで推定されている心理プロセスは、アメリカなど欧米文化にある意味と慣習のパターンに即応した文化的構成体であると考え

られる。つまり、この情報処理のシステムは欧米にある文化のパターンのなかに埋め込まれることにより確立し、機能する。よってその妥当性は普遍的というよりは、地理的にも歴史的にもきわめて局所的であろう。

### 5.3.2 アジア圏の属性推論研究

属性推論課題における状況要因の重視 図5-1のモデルから、相互協力的自己観によって成立しているアジア圏の社会で育ちそこに住む人々の間では、対応性バイアスは見られないであろうと予測できる。一見、この予測への証拠は弱いかに見える。いくつかの研究は対応性のバイアスがアジア圏の文化では弱まるか消失することを示しているのに対して (Kitayama & Masuda, 1997; III, 1996; Choi & Nisbett, 1996; Study 2; Toyama, 1990 の説明条件)。別の研究は欧米での場合と同程度のバイアスがあることを示している (Choi & Nisbett, 1996; Study 1; Toyama, 1990 の統制条件; Krull et al., 1996)。しかし、これらの研究を詳細に検討すると、少なくとも被験者が状況的要因に注意を払い、それを明白に認識していた場合には、このバイアスは消失するばかりでなく、逆転すらしうることがわかる。アジア圏の文化において欧米と同程度の対応性バイアスが見られた研究では、ジョーンズとハリスの研究の手続きがそのまま踏襲され、エッセイを書くにあたって選択の余地がなかった旨、実験の指示のなかに埋め込まれた簡単な文章で被験者に伝えられている。したがって、被験者が態度判断をする際に、この情報は思い出されず、その結果、考慮に入れられなかった可能性もある。これに対してアジア圏の文化において対応性バイアスがきわめて弱いか消失・逆転することを示した研究では、このような解釈上の問題を排除するためになんらかの手段が用いられている。

状況要因の認識と対応性バイアスの関係を日本で検討するために、増田 (1996) は、キルバートとジョーンズ (1986) に準じた4条件を比較した。まず導入条件の被験者は、フランス核実験に賛成か反対かのエッセイの一方を選択し、それを刺激人物に読むように指示した。そのうえで刺激人物はエッセイを読み、被験者はこれを見てフランス核実験について刺激人物が持つ態度を推測した。先に述べたように、自らが状況要因を課す、このような条件でも、アメリカ人は強い対応性バイアスを示すことが知られている (Gilbert & Jones,

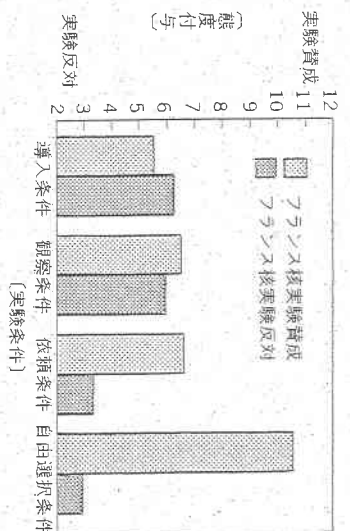


図5-2 状況要因により異なる4条件において、刺激人物に付与されたフランス核実験についての態度 (増田, 1996より)

1986)。次に観察条件の被験者は、導入条件の様子を観察し、刺激人物の態度を推測した。さらに依頼条件の被験者は、刺激人物は実験者にいずれか一方の立場のエッセイを書くように依頼され、それに応じてエッセイを書いたと指示された。最後に自由選択条件の被験者は、刺激人物は実験者にいずれかの立場を自由に選んで書くように言われたと指示された。結果は図5-2にまとめられている。まず、自由選択条件ではエッセイの立場に対応した態度が強く非測されていた。これが依頼条件ではかなり弱くなり、最後に状況要因を際立たせた導入条件と観察条件では、刺激人物に付与された態度はエッセイの内容にほとんど対応しなかった。よって、日本においては少なくとも状況要因に注意が向きさえすれば、対応性バイアスは消失すると結論できる。同様のデータはチャイトとニスベツト (1996)、外山 (Toyama, 1990) らの研究からも得られている。上にあげた研究では、状況要因を際立たせるために入念な手続きが用いられているが、北山と増田 (Kitayama & Masuda, 1997, Study 2) は同様の目的のために、状況要因をかなり詳しいストーリーのかたちで日本人被験者に提示した。被験者は、沖縄の米軍基地存続の可否についてのエッセイから、その書き手の態度を判断した。判断に先立って、エッセイの書き手は、①そのエッセイの立場を自由に選択したか (自由選択条件)、②そのような選択の余地はなかったか (選択なし条件)、あるいは、③ゼミの先生の依頼を受けて選択したか (依頼条件) のいずれかか詳しいストーリーのかたちで被験者に提示されていた。まず、自由選択条件では、エッセイの内容に対応した態度がエッセイの書き手

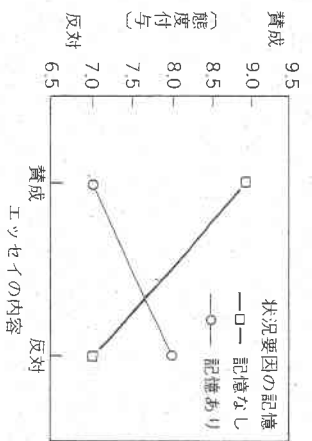


図5-3 状況要因の記憶と対応性バイアス  
(Kitayama & Masuda, 1997 より)

に付与されていた。しかし、状況要因が存在した他の2条件ではこのような推論は完全に消失していた。特に依頼条件では、対応性バイアスは有意に逆転し、エッセイとは逆の立場が刺激人物に付与されていた。

さらにこの研究では、状況要因への注意と対応性バイアスの関連をみるために、態度判断の後、そこまで提示された情報をすべて思い出すように被験者に求めた。状況要因に十分注意を払った者は、この情報を思い出すことができであろう。図5-3にまとめたとように、選択なし条件と依頼条件の被験者のうち、この再生課題で条件要因を思い出せなかった者には有意な対応性バイアスが見られた。この結果は、状況要因に注意が向かなければ、日本でも対応性バイアスが起きるといわれる分析に一致している。一方、状況要因を思い出せた者には対応性バイアスの逆転現象が認められた。この結果も統計的に有意だった。つまり選択なし条件でも依頼条件でも、状況要因を十分に加味した被験者は、エッセイの内容とは逆の態度を刺激人物に付与していた。これは、少なくとも日本人の場合、状況要因が注目されると、その効果を過大視する認知的バイアスが生じることを示している。つまり、「ほんね」はその逆であると推論するようである。守屋(6章)は、日本人は、すでに小学生の時点で「ほんね」と「たてまえ」を区別したストーリーを話すことを示した。

社会的説明における状況要因と属性要因 ここまで述べた属性推論課題では、社会的判断における素朴理論の関与は間接的に示唆されているのみである。こ

の点についてのより直接的な証拠は、社会的説明についての比較文化的研究により得られている。まず、ミラー(Miller, 1984)の研究では、アメリカ人とインド人の被験者に知り合いの行動の原因を説明させ、説明内容を分析したところ、アメリカ人は抽象的な性格特性を用いることが多かったのに対し、インド人は状況要因を用いることが多かった。さらに、このような違いは6歳以降年齢が増すにしたがって大きくなっていった。この結果は、それぞれの文化にある素朴理論は、社会化の過程を通じて取り込まれていくことを示している。

モリスとペン(Morris & Peng, 1994)は、新聞記事の内容にも同様の文化差が見られることを示した。具体的には、アメリカで近年起きた二つの殺人事件についての中国系の新聞とアメリカの一般紙の記事を分析したところ、アメリカの一般紙は事件の原因を殺人者の内的属性に帰因しがちだったが、中国系の新聞は状況要因に帰因しがちだった。加えて、類似した仮想的事件について説明を求めると、アメリカ人と中国人の学生はそれぞれ、これら新聞の記事に見られたのと同様の説明のバイアスを示した。同様の知見は、リーら(Lee et al., 1996)による、香港とアメリカの解説者によるスポーツの結果についての説明の比較や、ホワイト(White, 1982)による、病気観についての中国とアメリカの文化比較においても得られている。これらの研究は、社会的推論が文化にある素朴理論により部分的に媒介されているという図5-1の仮定の妥当性を示している。

日本語理解におけるイントネーション情報の優位性 図5-1のモデルで仮定されているもう一方の文化的媒介過程は、実践依存型である。このようなプロセスの存在は、欧米においては自発的屬性推論の現象により示唆されている。これに対して、アジアにおいては、「相手の心を察する」ことを前提とした会話の習慣が文化的に定着しているため、これと連動する情報処理のバイアスがあると予測できよう。特に会話においては、言語内容以外の要因に自発的に注意を向け、これら状況要因を組み込んで発話意図を推測する情報処理様式が発達していると考えられる。この点は日本語においては、たとえば「いいよ」といった言語内容がイントネーションや対人関係といった状況要因により、「よい」にもなるし、「もういいいから帰れ」にもなるといった事実からうかがえる。

北山と石井(Kitayama & Ishii, 1997b)は、状況要因として発話のイントネ

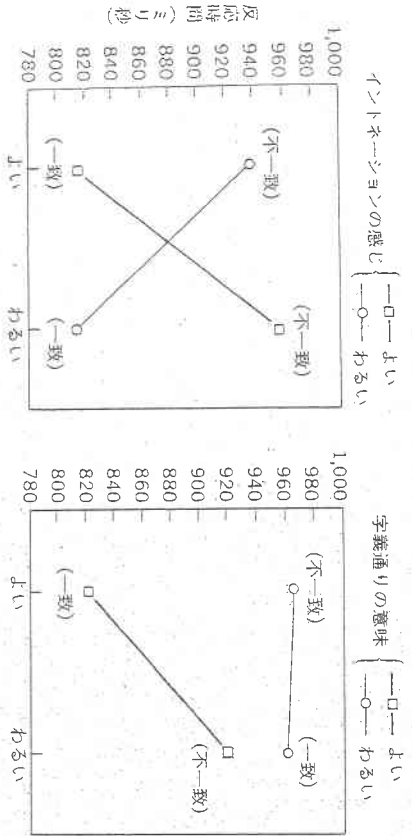


図5-4(A) 字義通りの意味判断に要した時間：イントネーションの一致・不一致の効果

図5-4(B) イントネーションの判断に要した時間：字義通りの意味の一致・不一致の効果

ーションに注目し、日本人の状況依存的情報処理様式を検討した。もしイントネーションをもとにして言語内容の意味が左右されるとしたら、発話の理解を通じて、言語内容（たとえば、「いい」）の記憶表象は、イントネーションの感じ（たとえば、「悪い」）と一致する方向に変化するであろう（たとえば、「もう帰れ」）。しかし、イントネーションの記憶表象は言語内容の一致・不一致にかかわらず、比較的一定であろう。これらの仮説を検証するために、いい意味をもつ単語（たとえば、きれい、まじめ、かしこい）と悪い意味をもつ単語（たとえば、きたない、こわい、（ばか）を感じる）のいいイントネーションか感じの悪いイントネーションで読んだ刺激を用意し、これらを被験者に聞かせた。それぞれの単語が提示された直後に、その字義通りの意味の善し悪しか、イントネーションの感じの善し悪しについて判断するように求め、反応時間を計測した。どちらの判断をするかの指示は、単語を提示した後になされた。したがって、この課題の成績は当該情報の記憶の性質に依存している。

結果はここでの分析に一致していた。まず、図5-4(A)に示したように、字義通りの言語的意味の判断に要した反応時間は、イントネーションが不一致の場合に、一致していた場合より長かった。これは、イントネーションに応じて言

語内容の記憶表象が変化していたという、ここでの分析に一致している。これに対して、イントネーションの感じの判断に要した時間（図5-4(B)）では、言語内容の一致・不一致による効果ははるかに弱かった。これは、イントネーションの感じは所与のものとして、発話意味推論の際の基準になっていたとすることでの分析に一致している。この結果は、日本においては会話の理解にイントネーションなどの状況要因が、非常に強く影響を及ぼしていることを示している。さらに、単語の理解に社会的行動についての素朴理論が直接関与しているとは考えがたい。したがって、会話理解におけるイントネーション情報の優位性は、日本にある会話の習慣に参加することを通じて形成された恒常的認知バイアスであると考えられる。

#### 5.4 文化的媒介モデルの意義と将来の展望

本章では、特に内的属性の推論に注目して、対応性バイアスは欧米では非常に強固であるが、日本を含むアジア圏の文化では、少なくとも状況要因が被験者の注意を引きさえすれば、このバイアスはおおむね消失するか、さもなくば逆転することを示した。さらに、社会的認識の文化的媒介モデルを提示し、これらの推論バイアスは文化にある素朴理論と慣習パターンの変換により媒介されていると指摘した。これまでこの両者が理論的に区別・統合されることはほとんどなかったが、これらそれぞれの性質をさらに検証することにより、社会的認識研究の将来に向けて新たな展望が開けるであろう。

##### 5.4.1 社会的知覚のユニット：文化的素朴理論の性質

文化的媒介モデルの柱の一つは、知識依存型の媒介過程である。本章での考察から、欧米の相互独立的素朴理論では、個人がユニットであるが、アジア圏の文化ではむしろ関係性がユニットになるという可能性がみえてくる。かつて

4) 欧米においては発話内容に対応した発話意図が自動的に推論されるとしたら、同様の課題で言語的意味の判断をする際、イントネーションを無視することは容易であろう。これを支持するデータと議論は、北山 (Kitayama, 1996; Kitayama & Howard, 1994; Kitayama & Ishii, 1997a) により報告されている。